

慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻

コジューリナ エレーナ

平成 26 (2014) 年度

博士学位請求論文

鬼のイメージ変遷に関する歴史民俗学的考察—酒呑童子を中心として—

要約

序章

1. 問題の所在および研究目的

本研究は、日本人が持つ鬼のイメージとその変遷に関する理解、さらに鬼のイメージ変遷を通しての日本文化変遷の理解を目指したものである。具体的な研究対象としては、「酒呑童子」説話に登場する鬼、酒呑童子を設定した。

「酒呑童子」の最古の伝本『大江山絵詞』の中の鬼のイメージは、様々な解釈ができ、太古からあらゆる要素を吸収しながら形成されてきたいくつもの鬼のイメージを反映している。つまり「酒呑童子」の伝本が南北朝時代の頃までしか遡らないが、中世以前の鬼の理解にも繋がる。「酒呑童子」は絵巻、能、歌舞伎、人形浄瑠璃、浮世絵、草双紙などの形で伝えられてきた。京都府と新潟県には酒呑童子縁の地があり、文献とは内容を異にする伝承も伝わっている。「酒呑童子」は近・現代においても幼年唱歌、映画、小説やコミックの基となっている。京都府と新潟県で行われる酒呑童子を生かした町おこしイベントも現代における鬼のイメージ変遷を表すものとして分析できる。酒呑童子をキーワードに鬼の全体像の研究、またそれを通しての日本文化の動態的研究を試みた。

2. 研究方法および研究枠組み

研究資料としては酒呑童子が登場する文学作品、美術作品、民間伝承、芸能や娯楽を扱った。酒呑童子を活用した町おこしイベントにも注目した。研究方法は、資料の分析及び酒呑童子関連の民間伝承が伝わり、町おこしイベントが開催される地域の調査である。テキスト資料の分析の際は、解釈学のようなテキスト分析を行う学問の成果を視野に入れた。図像資料の分析にあたっては、今日脚光を浴びている絵画資料論の視点から検討を試みた。町おこしイベントに関しては、民俗学においてまだ比較的新しい研究対象である文化資源化とフォークロリズムの問題との関連で考察した。

鬼や酒呑童子に関する資料は様々な種類があり、先行研究もあらゆる研究分野においてなされてきたが、本研究では、なるべく広い範囲の先行研究と資料の分析及び聞き取り調査を行い、歴史民俗学を軸にしながら学際的な考察を試みた。

第1章 先行研究の検討

1. 鬼の研究

鬼は文学、芸能研究、民俗学、宗教学、社会学や美術史という文化と歴史に関わる多彩な学問の枠組みにおいて研究されてきた。

鬼のイメージ変遷を中心になされた先行研究の多くは、古代において姿が見えないとされていた鬼が中世に入ると、物の怪や疫病神の恐怖と結び付くとともに、仏教における鬼、護法などのイメージによって、次第に具体的にイメージされはじめ、説話と絵の世界にも表現されるようになったという結論を導き出している。しかし、鬼のイメージは、中世にその基本が生成した後も、様々な変化を遂げたのであり、中世以降・現代にかけての鬼のイメージ変遷についての考察はまだ少ないように思える。

2. 酒呑童子の研究

2. 1. 酒呑童子伝説について

酒呑童子の話の典型と言えるものは享保年間（1716 - 1736）に大坂の板元渋川清右衛門が刊行した『御伽草子』に収められている。本書所収の「酒呑童子」は一条天皇の時代（986 - 1011）に、人さらいをしていた丹波国大江山の鬼であった酒呑童子を勅令を受けた源頼光らが、神仏の力を借りて、お酒で酔わせて退治する話である。

酒呑童子の住処については、大江山とする大江山系統の他に、近江国伊吹山とする伊吹山系統もある。伊吹山系統で最古とされるのはサントリー美術館所蔵『酒伝童子絵巻』（室町時代）である。

新潟県燕市の分水地区（旧西蒲原郡分水町^{にしかんぼらくんぶんすいまち}）には一般的に知られる酒呑童子伝説の前日譚と言える伝説がある。女性に異常な人気を持っていた国上寺の稚児、外道丸が、大量の恋文を燃やし、その煙によって鬼になった話である。

京都府には二つの大江山がある。山城と丹波の国境に当たる大江山と、丹後と丹波の国境近くの千丈ヶ嶽を主峰とする大江山連峰がある。一般的に酒呑童子の山と思われるのは後者である。古代・中世における大江山は前者を指していたと考えられる。

2. 2. 酒呑童子の研究

酒呑童子研究においても、鬼の総合的な研究と同様に、様々な角度からの複数の論考がなされてきた。酒呑童子関連の資料は、文学作品が大半を占めるため、酒呑童子に関する研究は、しばしば文学研究者によって行われる。さらに、歴史、宗教史、民俗学の観点からの考察も見られる。酒呑童子の図像も多数あるため、「酒呑童子」は美術史学者の側からも注目される。芸能研究の分野でも、酒呑童子説話が演目の素材となっていて、酒呑童子関連の考察がなされている。

酒呑童子に関する論考においておよそ次のような問題が触れられている。

- 1) 酒呑童子の正体
- 2) 酒呑童子説話の意味
- 3) 酒呑童子説話成立の歴史的・文化的・文学的環境
- 4) 酒呑童子説話の複数の要素の解明
- 5) 「酒呑童子」伝本の比較

第2章 文献に表れる酒呑童子のイメージ

1. 逸翁美術館所蔵『大江山絵詞』

『大江山絵詞』（逸翁本）は逸翁美術館が所蔵する絵巻である。南北朝・室町初期成立で、残っている酒呑童子物の中で一番古い。逸翁本の詞書に見える酒呑童子のイメージについて考察し、そのイメージには様々な要素が合わさっているが、とにかく人肉を食らう恐ろしい鬼のイメージよりも不老不死の神のような存在としての性格が強いという結論を出した。

2. 謡曲『大江山』

逸翁本に続いて室町時代に謡曲『大江山』が作成される。

この謡曲の特徴は、後に渋川版『御伽草子』の「酒呑童子」に受け継がれる酒呑童子の人間味のある描写である。それは酒呑童子が稚児と山伏の親しい間柄の話をして、頼光らと積極的に仲良くしようとしているところや彼の攻撃されたときの「鬼に横道なきものを」という言葉などに表れる。さらに洗濯女が血の付いた衣を洗っていた場面以外に酒呑童子の残酷さを感じるような怖い場面がほとんど見られないのも絵巻『大江山絵詞』との違いである。

3. サントリー美術館所蔵『酒伝童子絵巻』とその系統

サントリー美術館所蔵『酒伝童子絵巻』（サントリー本）は逸翁本の成立から半世紀以上～一世紀前後が経ってから、大永2年（1523）頃に作成されたとされる。伊吹山系統の中で一番古い。

サントリー一本以降はその写しと思われる作品がたくさん作成された。本章で採り上げた東洋大学附属図書館所蔵絵巻『酒伝童子絵』もその一つである。逸翁本の詞書と東洋大本の詞書を比べて、逸翁本とサントリー本系統の比較を行なった。

東洋大本（サントリー本系統）の酒呑童子は逸翁本において見られたその神的性格を失い、彼の怪物として特徴が強調されるようになる。鬼の残酷さと人間に対する非友好性が強く感じられる。酒呑童子とその眷属は完全な否定的主人公である。

4. 渋川清右衛門板『御伽草子』所収「酒呑童子」

南北朝時代からおおよそ3世紀にわたって手書きの写本によって伝えられていた酒呑童子

物語にとって次の新しい展開となったのは、17世紀の後半頃から始まった大坂の版元渋川清右衛門によって印刷本としての出版である。この出版は伝説がもっと広く一般に流布するようになり、江戸時代を通じて一番有名な鬼退治の物語となったきっかけでもあった。

『御伽草子』の「酒呑童子」の文章に見える酒呑童子のイメージの分析、そして逸翁本と東洋大本に見るイメージとの比較を行なった。

『御伽草子』「酒呑童子」は酒呑童子の住処を丹波国大江山とし、大江山系統の作品として分類されるが、サントリー本系統の影響が強く感じられる。また、逸翁本にもサントリー本系統にもなかった描写を見出すことができる。逸翁本、サントリー本などには注文主がいて、作品は注文側の影響で作られていた。例えば、逸翁本の場合は、裕福層か権力層の者と思われる注文主の感化で王権説話としての色彩が加えられ、絵巻が成立したのであろう。サントリー本は武家の注文で作成された。『御伽草子』「酒呑童子」の場合は今まで手書きの写本で伝わっていた物語をより広く一般向けに流布させ、印刷本を売り出すという目的だけがあつて、具体的な注文主の影響はなかった。従って、『御伽草子』「酒呑童子」は従来の諸伝本をまとめた集大成的なものと言えるだろう。一貫性のない酒呑童子のイメージであるが、サントリー本以降の形象の定着傾向が見られる。

5. 江戸時代の絵本

江戸時代の絵本と言えば、草双紙である。草双紙は江戸時代の大衆向けの絵入りの読み物で、表紙の色や製本によって赤本・黒本・青本・黄表紙・合巻などと呼ばれている。草双紙は絵が中心で、その中で地の文と登場人物の会話文が書き込まれている。酒呑童子の話は江戸時代には大人気だったので、草双紙の中に酒呑童子説話を題材にした作品が多い。

赤本の酒呑童子ものは、渋川版などで知られた説話をそのまま絵本にしていると言える。

黒本・青本の酒呑童子ものは酒呑童子説話だけを題材にしているものはほとんどない。酒呑童子説話をないまぜて作品を構成したものが多い。しかし、他の話が一緒に題材となっていて、酒呑童子説話は、赤本の場合と同じように、ほぼ定番の形のまま伝えられている。

黄表紙の内容は洒落や風刺に満ちて、よく知られている話をパロディー化したものが多い。酒呑童子の話も人気の物語の一つとして黄表紙でパロディー化されることがあった。黄表紙は説話のイメージだけを利用し、新たな作品世界を作り出している。酒呑童子のイメージも新しく作られたと言える。以前の酒呑童子物におけるイメージとは裏腹に、酒呑童子はもはや恐怖の対象ではなく、笑いの対象なのである。

6. 巖谷小波の『日本昔噺』所収「大江山」

巖谷小波が平易に書き直した物語を集めたものとして1894年から1896年にかけて博文館から発行された『日本昔噺』が有名である。酒呑童子の話を基にした「大江山」は渋川板を種本とした痕跡がいちじるしいが、子供という読者を意識した教育的な配慮がはたら

いている。残酷な描写が控えられ、酒呑童子の犠牲者は女性から子供たちに変えられている。酒呑童子の童子として一面や美しい四季の庭の描写などが省かれ、酒呑童子のイメージは退治すべき恐ろしい鬼という極めてシンプルなものになっている。さらに明治という啓蒙の時代には鬼の論理的な解釈が求められるようになり、酒呑童子は実は盗賊だったという解釈がなされている。

第3章 図像に表れる酒呑童子のイメージ

1. 絵画資料の研究

本章では、絵巻、浮世絵や絵本における酒呑童子のイメージに関する考察を試みた。

絵画資料研究の問題の一つは時代が分からないものが多いことである。また、酒呑童子をテーマにしたものの大部分が江戸前期に作られたことが時代ごとに変遷を見る作業を難しくする。これらの問題点を意識しながら、できるだけ時代の分かる代表的なものを選び、作品の大部分が集中している江戸前期に偏らないように注意した。

2. 酒呑童子が登場する場面

酒呑童子が絵巻や絵本の挿絵において登場する場面は次の通りである。

- 1). 酒呑童子が道に迷った山伏に変装した頼光らを迎えるとき、初めて姿を表す場面（巨大な「童子」として登場する）。
- 2). 頼光一行との酒宴の場面。
- 3). 酒に酔い潰れ、寝所で恐ろしい鬼の姿で寝ている場面（多くの姫君に囲まれて、手足を揉んでもらっている）。
- 4). 頼光一行との戦いの場面。
- 5). 酒呑童子の斬られた首が運ばれている凱旋の場面。

3. 絵巻に描かれた酒呑童子とその眷属

3. 1. 逸翁美術館所蔵『大江山絵詞』の挿絵

逸翁本の挿絵によって作り出される酒呑童子の住処には異界的な性格が強く感じられる。それはタイル張りの床などの背景にも見られるし、様々な化け物も場の異界性を物語る。逸翁本が成立した時代にはすでに存在していた人間を苦しめる食人的な地獄の鬼のイメージは、逸翁本の詞書には少し反映されているものの、挿絵にはほとんど確認できない。鬼姿の酒呑童子が五色に染められていることは、彼を超自然的な能力を持つ荒ぶる神として性格付けている。これは人間を苦しめる単純な役割を果たす地獄の鬼を超えた存在である。逸翁本に描かれた酒呑童子には古代日本にあった恐ろしい神としてのイメージが仏教の影響によって作り上げられた地獄の鬼のイメージとともに見えている。

3. 2. サントリー美術館所蔵『酒伝童子絵巻』の挿絵

サントリー本によって作り出される酒呑童子とその眷属のイメージが後に作成された作品の多くにおいて典型として受け継がれるようになる。サントリー本に登場する鬼たちは逸翁本の鬼たちに比べて、統一された描き方によって描写されていて、非常に攻撃的である。また『地獄草紙』から採り入れられた食人的なエピソードが加えられている。これらの特徴は鬼イコール地獄という認識の表れであって、酒呑童子の世界を逸翁本のような仙境的な世界ではなく、地獄的な世界として性格付けている。鬼姿の酒呑童子の描写にも神的な要素が取り除かれていて、動物的な要素、単なる化け物としての性質がはっきりしている。第2章でも結論したように、逸翁本とサントリー本は同じ酒呑童子物語を伝えているものの、異なる性質の作品である。神仏の力を借りた神のような能力を持った武士が仏法と王権を脅かす酒呑童子という超自然的な存在を倒す物語から単純な怪物退治譚への変換がうかがわれるのである。

3. 3. 江戸前期の絵巻の挿絵

江戸前期には酒呑童子物語をテーマにした大量の絵巻が作成された。その中の二つ、慶應義塾図書館所蔵『しゅてんとうし』とチェスター・ビーティー・ライブラリィ所蔵『大江山絵巻』を分析した。

1) 慶應義塾図書館所蔵『しゅてんとうし』の挿絵

慶應義塾図書館所蔵『しゅてんとうし』絵巻（慶大本）の作成時代は寛文（1661 - 1673）より後とされる。大江山系と分類されるが、挿絵は明らかに伊吹山系の伝統を受け継いでいる。文章も、酒呑童子の住処が大江山とされているが、伊吹山系の伝本との類似箇所が多く見出される。諸伝本に比べて、長くて詳細である。

サントリー本では、日本的な異界として描写されていた鬼の世界は、ここでは外国風の描き方によって表現されている。酒呑童子初登場の描写に彼の恐ろしさがすでに強調されている。酒呑童子の前の両側に眷属の鬼たちがたくさん集まっている。赤鬼、青鬼や黒鬼で、怖い、やや滑稽な表情を見せている。この絵巻においては角と虎の皮の褌という鬼の特徴が逸翁本とサントリー本より多く描かれていて、もっと鬼らしい、つまり現代の固定した鬼のイメージに近い鬼となっていると言える。慶大本で描かれた鬼姿の酒呑童子はサントリー本と同じように巨大な赤鬼となっているが、立派な牙、角と虎の皮の褌がはっきりと見えていて、鬼らしさ、怪物らしさが強くなっていると言える。

2) チェスター・ビーティー・ライブラリィ所蔵『大江山絵巻』の挿絵

次はアイルランドのチェスター・ビーティー・ライブラリィ所蔵『大江山絵巻』（チェスター・ビーティー本）の挿絵を分析した。この絵巻は豪華で、極彩色の鮮やかな絵が印象的である。絵は他の作品に比べて、かなりの独自性を持っている。特に、細かい感情まで伝えようとしている登場人物の表情の描き方が魅力的である。この絵巻は酒呑童子の住処

を大江山とするが、伊吹山系と分類される。

頼光一行の前に飛び出してくる酒呑童子の眷属の鬼たちはここまで見てきたサントリー本と慶大本と違って、脅かしているだけでなく、思いっきり攻撃的な態度を取っている。彼らは人間よりやや大きく描かれていて、赤鬼、青鬼など、様々な色の鬼となっている。筋肉隆々の裸に虎の皮の褌と角という鬼の典型的な特徴がたくさん見られる。

酒宴の場面を表す挿絵で注意を引くのは、斬られた人間の手足の描写が多くなっていることである。サントリー本と慶大本には様々な御馳走が出されていたが、ここはほとんど人肉と血の酒である。鬼姿の酒呑童子は巨大な赤鬼となっていて、特に大きく描写されているという特徴を除いて、この絵巻の他の赤鬼と変わらない格好をしている。彼の寝所に侵入した武士は、鬼王の首だけでなく、両足と両腕も切り落とす。ばらばらにされる酒呑童子の身体から大量の血が流れている。この場面が続く部下の鬼たちとの戦いは他の作品より多くの挿絵を占めている。これも血生臭い雰囲気には溢れているが、やや滑稽な様子でもある。

4. 渋川清右衛門板『御伽草子』所収「酒呑童子」の挿絵

渋川板『御伽草子』の「酒呑童子」に含まれている白黒の10枚の挿絵の中の4枚に酒呑童子が登場している。酒呑童子が右手に杖代わりに柄の長い斧を持って左手を振って頼光一行を迎える場面、人間の足が真中に御馳走として出ている酒宴の場面、眷属の石熊童子が酒宴で舞をする場面、頼光一行が恐ろしい鬼に姿を変えた酒呑童子を倒す場面である。この4枚の絵はサントリー本に遡る伝統的な描き方に従っていると言えるが、それを少し省略している印象を与える。

5. 浮世絵版画

酒呑童子の話は江戸前期から明治の初めにおいて特に人気があって、それをテーマにした多くの浮世絵が作成された。ほとんどの作品に共通する酒呑童子の典型的な特徴は、彼が常に多くの美女に囲まれる長い髪の毛を垂らした大男であって、酒をたくさん飲むということである。鬼に姿を変えた酒呑童子を描くものがだんだん少なくなっていく傾向が見られる。頼光一行が攻めてくる場面でも酒呑童子がしばしば鬼というより巨人の格好をしている。酒呑童子を山賊の首領として解釈するものが多い。食べる人肉が魚や動物の肉に変えられていて、眷属が鬼ではなく人間として登場する。酒呑童子を鬼のような人間または鬼の振りをしていた人間とする見方が強まっていったと言えるだろう。江戸の人々は中世の人々と違って、すでに昔の伝説のそのままの形に満足できず、すべてを論理的に説明する新しい解釈を求めていた。浮世絵の多くは「酒呑童子とその眷属は実は山賊だったのだ」と物語るような気がする。

6. 江戸時代の絵本の挿絵

第2章では草双紙の文章に見える酒呑童子像を論じ、特に黄表紙のパロディー化したものに焦点を当てた。草双紙は文章が少なく、絵が中心なので、その絵にさらに注目した。

赤本以来の草双紙における酒呑童子の描き方は、童子姿から巨大な鬼に変身という先行の酒呑童子物から受け継いでいる。しかし、黄表紙となると、酒呑童子のこの不思議な変身が笑いの対象となってくる。

7. 巖谷小波の『日本昔噺』所収「大江山」の挿絵

「大江山」にある8枚の挿絵の中の3枚に酒呑童子が登場している。酒宴の場面、酒呑童子の斬られた首が頼光を攻撃しようとする場面と酒呑童子の首が運ばれているという三つのエピソードである。

酒宴の場面の描き方は『御伽草子』など先行の作品で描かれてきた描写の面影を残している。「大江山」の文章によって作り上げられるこの場面の酒呑童子のイメージは、すでに鬼としての性格の強いものとなっているが、挿絵ではやはり人間、つまり定番の童子として描かれている。眷属の鬼は三匹しかいないが、外国風の服を着ていて、小さな角がなければ、人間と間違えられるぐらい人間的に描かれている。この場面には定番のまな板に盛り付けた人間の股肉は出てこない。「大江山」は子供向けの啓蒙的な作品として、文章においても、挿絵においても残酷な描写を控え目している。

「大江山」の挿絵はサントリー本以降の酒呑童子の伝統的な描き方の主な点を探り入れている。それは童子としての描写と飛びまわる首の強調された恐ろしさである。新しいニュアンスを加えた発展した画風によるこの描写は退治される運命を持つ恐ろしい鬼という酒呑童子のイメージを作り出している。

第4章 民間伝承と民俗の中の酒呑童子のイメージ

1. 1. 京都府福知山市とその周辺の酒呑童子伝説

酒呑童子伝説に出てくる大江山は、一般的には、今の京都府北西部、福知山市にある大江山と言われる。福知山市大江山連峰周辺、及び三岳山周辺を中心に、酒呑童子関連の伝説と旧跡が数多く残っている。ここでは主に大江山一帯及び三岳山一帯に見出せるその伝説と旧跡についてまとめたが、省略する。

1. 2. 大江山周辺に伝わる他の鬼伝説

福知山市大江山連峰周辺には酒呑童子伝説の他に日子坐王ひこいますのみみの土蜘蛛退治伝説と麻呂子まろこ親王しんのうの鬼退治伝説が伝わっている。両方の伝説を紹介し、酒呑童子伝説との関連について述べた。

1) 日子坐王の土蜘蛛退治伝説

武士が勅令を受けて、人々を苦しめていたものを退治するという日子坐王の土蜘蛛退治伝説の主な粗筋が酒呑童子伝説と似ている。酒呑童子の住処大江山も土蜘蛛の隠れ場所と

して登場している。日子坐王の土蜘蛛退治伝説は酒吞童子伝説の形成において礎の一つとなったかも知れない。

2) 麻呂子親王の鬼退治伝説

酒吞童子伝説と麻呂子親王伝説には、鬼の住んでいた場所が同じ大江山だったことをはじめ、類似点が多く、両者が密接な関係のもとに発展していったことがうかがわれる。

2. 京都府京都市の首塚大明神

2. 1. 首塚大明神の由来

首塚大明神は、酒吞童子伝説に関連する旧跡の一つで、「酒吞童子の首塚」「首塚さん」とも呼ばれる。山城と丹波の国境碑の近く、京都府京都市西京区大枝沓掛^{くつかけ}町の旧道沿いの「老の坂」にたたずむ小祠である。祠の横にある説明板の説明によると、源頼光らが丹波と丹後の国境の近くの千丈ヶ嶽のある大江山連峰で酒吞童子を退治し、そのはねられた首を証拠として都に持ち帰ろうとしたが、ここで「鬼の首のような不浄なものを都に持ち込んだらいけない」と地蔵さんに止められ、首が持ち上がらなくなり、埋めるしかなかった。そして、酒吞童子が首より上の病気（頭痛や脳の病気）を治してくれる首塚大明神として祀られるようになったと言う。学業成就の信仰も集めている。

2. 2. 首塚大明神の例祭

首塚大明神の例祭は毎年4月15日に行われる。例祭の参詣者は、関西圏の人々が見られ、毎年合わせて80人ぐらいが集まる。祈祷の後、参詣者は社殿の後ろの首塚に向かって、その上にお酒をかける。

2. 3. 首や首塚に関する伝説

首塚大明神の由来伝説はユニークなものではなく、各地に伝わる鬼の首と鬼の首塚の伝説のバリエーションであると言える。鬼退治の伝説に、副伝説のように、打ち取った首の運命に関する伝説が付き加えられる場合が多い。鬼の首が他の身体の部分に比べて、特別のものとされるのは「首狩り」の慣習と関係していて、鬼の首塚を作ることによって鎮魂と祭祀を行うのも首狩りに発した首の供養の慣習に遡る。

2. 4. 首塚大明神の歴史的背景

首塚大明神の歴史的背景の第一は、交通の要衝としての老の坂である。大江山は山城と丹波の国境にあり、京都から丹波・山陰方面へのただ一つの主要道路が通っていた関門に当たる。ここに関所や宿場が置かれ、多くの人々がこの交通の要衝を行き来していた。老の坂が交通の要衝であったことから、様々な情報が行き交い、茶屋や旅籠の人々の間に蓄積されていった。特に丹波路にあるもう一つの大江山と通じる交通路に位置していたことから酒吞童子伝説が相互に連携して生成したと推測できる。

歴史的背景の第二は、盗賊征伐との関係である。多くの旅人が通っていた大江山は盗賊の出没するところであった。峠は物騒な場所で、危険に晒されているので、そこを通る者は神仏の加護を祈って通るといった境界の場であった。酒呑童子伝説の背景に史実の山賊征伐があるという説が広く述べられてきた。

2. 5. 道祖神信仰と地蔵信仰との関係

首塚大明神のある老の坂は、峠と坂で構成される境界の場であった。中世の日本では、境界は辻、橋、坂や交通路上の「点」のような形で存在し、魍魎魍魎が出没する空間として意識されていた。境界は疫神がよく出現する場所とされ、この世とあの世の中間の役割を果たして、病気や災いをもたらす鬼が入るのを防ぐ道祖神祭が行われた。四つの境のうちでも、老の坂は京都の西方に位置し、仏教風に言えば西方浄土の方位で、神仏が習合しやすい重要な境界になっていった。首塚大明神とともに老の坂に祀られている子安地蔵は、鬼の首のような不浄なものを王城としての清浄性を保つために京都へ持ち込まないようにと阻止したとする伝承があり、不浄なものを食い止めるという機能は、老の坂の境としての位置付けやここを祭場とした四堺祭の目的と重なる。首塚大明神のもともとの姿は道祖神だったのかも知れない。

3. 新潟県燕市周辺の酒呑童子伝説

新潟県燕市分水地区とその周辺には、酒呑童子退治の前日譚、彼の生い立ちの伝説が伝わっていて、それを浮かび上がらせる旧跡もたくさんある。酒呑童子は旧分水町の砂子塚^{すなごつか}というところに生まれたとされる。母親の胎内に一年六ヶ月も宿り、腹を蹴破って出た。生まれてすぐ歩き、言葉も分かるなど天才だったが、乱暴者で、子供ながら大酒を飲み、女に手を出したりしていた。当地の寺院、国上寺^{こくじょうじ}の稚児になってからは、乱暴を慎んでいたが、美男子だったため村娘から大量に届いていた恋文を整理しようとしたとき、異様な煙に包まれ、鬼の顔になったと伝えられる。

第5章 酒呑童子と町おこし

1. 京都府福知山市の場合

2006年に福知山市に編入された大江町はかつて豊かな農山村だったが、高度経済成長と産業構造の変化の結果で、あらゆる困難に直面した。過疎化する大江町を救うために、鬼伝説を活かした町おこしを始めた。30年以上前から毎年10月最終日曜日か11月最初日曜日に酒呑童子伝説をモチーフにしたイベント、大江山酒呑童子祭りが行われる。祭りの日には「酒呑童子」や「頼光」が登場する「鬼武者行列」などを観ることができる。伝説を題材とした演劇も演じられる。酒呑童子祭りと同時に「千年の森ウォーキング」という鬼伝説関連のスポットを訪れるコースや当地の自然、歴史と文化を楽しむコースのウォーキングイベントが行われる。福知山市には他にも鬼関係の行事、鬼シンポジウムや鬼サミッ

トが開催されるが、酒呑童子が主役となることが多い。

2. 新潟県燕市の場合

酒呑童子のイメージは新潟県燕市の町おこしと観光事業にも使われている。新潟の酒呑童子伝説に娘たちの熱い思いと恋文が登場するということと結び付けて、1997年には、国上寺近くの「道の駅」^{くがみ}国上エリアに酒呑童子を縁結びの神として祀る酒呑童子神社が新たに建立された。

京都府の酒呑童子祭りに近い時期、毎年9月末 - 10月中旬頃に「越後くがみ山酒呑童子行列」というイベントが開催される。この行事は2005年から始まった催しである。2005年に開催された第1回の酒呑童子行列は分水町の閉町記念事業として行われた。分水町は2006年に燕市と合併した。酒呑童子生い立ちの伝説はまさに分水町を本場としているので、新しいイベントのモチーフとして選ばれた。2005年に開催された酒呑童子行列が好評だったので、合併の後も毎年行われるイベントとして定着したのである。

行列参加者は鬼面を装飾し、国上寺で出発セレモニーを行ってから、国上山を下って酒呑童子神社まで練り歩く。酒呑童子神社にたどり着くと、満願成就を祈願する。

3. フォークロリズムと町おこし

京都府福知山市と新潟県燕市の酒呑童子伝説をモチーフにした取組を現代において活用される民俗、つまりフォークロリズムの現象として考察することができる。

現代では、伝統行事などの民俗が観光資源として発掘されることがよく見られる。政府の一連の文化政策によって価値のあるものとして認められた民俗は、町おこし（地域の活性化）において活用されるようになった。

民俗は日常的に繰り返して行われるもの、自然に伝わっていくものである。特に注目されることがなく、その価値も問われない。しかし、この日常的な行いが消滅危機に直面すると、保存と研究に値する文化として発見される。また、特定の民俗を持つ共同体そのものが危機に直面すると、不安な気持ちになり、自分たちがこれまで歩んできた歴史を振り返り、自分たちとは何かと考える。そこで日常的に行ってきた生活や代々伝えてきた伝説が手がかりになる。民俗は伝統性や連続性によって特徴付けられるので、ここまで生きてきた歴史の証のようなものである。共同体の危機において、もともと地域にある鬼伝説のような民俗が活用されるだけでなく、酒呑童子行列のような新しい民俗らしいものが作られる場合もある。これらのことは人々に「伝統らしさ」による安定感を与え、危機を乗り越えるための力をくれると思われる。

第6章 現代の娯楽の中の酒呑童子

1. 妖怪ブーム

日本文化史において何回も妖怪ブームという社会現象が発生している今となつては、妖

怪ブームというより、確立した妖怪文化があり、ジャンルの一つとして定着していると言える。酒呑童子も妖怪と分類できるとなれば、この永続するブームにおいて採用されている。

酒呑童子が主役の「酒呑童子ブーム」はまだ起こらなかったが、この話に目を付ける天才漫画家のような人さえ現れたら、いつでも起こり得るのではないだろうか。ブームはないにしろ、とにかく酒呑童子はときどき現代の漫画、ゲームやアニメといった娯楽のジャンルに登場している。本章では現代の酒呑童子のイメージに注目した。

2. 現代の娯楽の中の酒呑童子

酒呑童子の物語は南北朝時代から明治時代にかけてとても人気だった。しかし、それからはしばらく忘れられていたと言っても過言ではない。その代わりに桃太郎の話が代表的な鬼退治譚として扱われるようになった。「酒呑童子」にも、「桃太郎」と同じように、誰もが知っている鬼の話に生まれ変わるチャンスがあったかも知れないが、そのチャンスは逃されたようである。酒呑童子の様々な要素からなる複雑なイメージが時代に連れて簡略化され、いわゆる典型的な鬼のイメージに近付いたが、やはりその両義性を残した。「桃太郎」の場合は、題名がはっきりと悪者の鬼を退治する英雄の名前となっていて、退治されるのは酒呑童子のような「鬼」の枠に納まり切れない複雑な性格の者ではなく、個人的な特徴を持たない鬼の群れである。「酒呑童子」にはないこの単純さこそが「桃太郎」の生命力の源であろう。

しかし、「酒呑童子」は『御伽草子』にも含まれている定番の中世説話であるので、いったん忘れられても、作家や漫画家が日本の古典文学に題材を求めたとき、再び浮上することになる。酒呑童子は現代も様々な娯楽のジャンルにおいて生き続けている。製作者は中世の物語によって想像力を刺激させ、酒呑童子説話の断片を作品に採用している。現代の漫画、小説やゲームの中の新しい酒呑童子はしばしば代表的な鬼として登場していて、倒すべき者となっている。一方、もともとの酒呑童子のイメージに込められている両義性を活かし、彼を正義の味方とするものもある。

終章 酒呑童子像に見える鬼の変遷とその意義

酒呑童子の話は南北朝時代に成立したと考えられる。室町時代と江戸時代にかけてあらゆる形で伝えられ、流行っていた話の一つである。明治時代には子供向けの昔話に生まれ変わった。現代の漫画やゲームでも酒呑童子説話の要素が採用されることがある。酒呑童子のイメージは両義的で、複雑だったが、だんだん簡略化されたのである。もともと神と鬼という両義的な性格を持っていた酒呑童子はだんだん純粋な鬼としてあくまでも負の属性を持つものとして把握されるようになった。さらに、人間が作り出した「表象」として様々な他の「妖怪」や「化け物」の集合体に混ざって、人間の娯楽の対象にまでなり、江戸の笑いの文化において採用された。

「怖いもの」「不気味なもの」であった妖怪たちは、日常の中でさまざまな限界を感じつつ生活している人々に現実を忘れさせる役割を担うようになった。かつて、妖怪を人間世界の外に追いやった人間は、今度はその妖怪たちの世界に癒しを求めているのである。